
駆け込み乗車

三上夏一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

駆け込み乗車

【Nコード】

N1751M

【作者名】

三上夏一郎

【あらすじ】

「今日こそは、断固として駆け込み乗車を許さない」と心に決めて出勤した地下鉄の運転手木島は、その通りのことを実行して悲劇を生む。

駆け込み乗車

三上夏一郎

次の駅が、近付いてきた。

「今日こそは、駆け込み乗車は絶対に許さないからな」

運転士の木島一成は、トンネルの闇に向かって眩きながら、ブレーキレバーを手前に引いた。

その地下鉄路線では最も深い地下にある次の駅は、エスカレーター
の降り口が、微妙な位置にある。飛び乗ろうとする乗客がもし、発
車のベルが鳴り終わる直前に駆け出すと、何とか間に合ってしまう
のだ。そのせいで、発車間際に駆け込んで来る乗客が必ず何人か
いる。それも、かなりの勢いで駆け込んで来るので、いつもひやひや
させられる上、電車が微妙に遅れる原因にもなっていた。

『今日こそは、必ず発車のベルが鳴り終わると同時に扉を閉め、電
車を発進させるのだ 断固として』

木島は、目の前にひろがる暗闇を睨みつけた。

出掛けに妻の郁子と激しく言い争ったおかげで、木島の気持ちは荒
れていた。今朝、玄関先で妻は木島にくっついてかかった。木島の実家
がある、東北地方のちいさな町の寺から、寄付の催促が来たとい
うのだ。

「出掛けにそんな話はやめてくれと言ってあるだろう」

「だってあなた、昨夜私が話をしようとしたらさっさと寝ちゃった
じゃないの」

「わかったわかった、じゃあ、そのことについては今晚ゆっくりと
話すことにしよう」

適当に話を切り上げて家を出ようとした木島だったが、妻は引き下

がらなかった。よほど頭にきていたらしい。

「どうせ私、絶対あんな寺のお墓には入らないんだから。望だって、絶対にそうはさせない」

「はあ？」

妻が娘のことを話しているのだと知り、木島は啞然とした。娘の望はまだ小学校の一年生である。その娘が、墓に入る時のことをこの女が考えているとは……

しばし言葉を失ってしまった木島に向かい、妻の郁子はまくしたてた。「あの子の進学に幾らかかると思ってるの？　そのために私がどんな思いでお金を節約して貯金してきたかわかってるの？　そのお金を……見ず知らずの田舎寺の坊主に塗り取られるなんて……絶対に許せない」

『まるで夜叉だ』

まくしたてる妻の顔を見ながら、木島は思った。話し合いは、成立しそうにない。

「わかったよ、何とかするから」

「どうせいつも口先だけでしょ！」

玄関にいればそれだけ文句が続きそうだと判断した木島は、妻の罵声を背中に受けて、逃げるように家を出た。通勤に使っている最寄りの駅に向かつて歩きながらしばらくすると、猛烈に怒りがこみ上げてきた。

『何か言いたいことがあったら、夜のうちに言ってくれ、出掛けにだけは、喧嘩しないようにさせてくれ、仕事に差し支えるからとあれほど頼んでいるのに……』

木島は、地下鉄の運転士である。出掛けに気持ちが悪くすると、一日中その日の運転に影響するのだ。墓と、娘の望の進学に関しては、ここ一年ばかり、ことある度に妻とは言い争ってきた。それにしたって何も朝、出がけにその話を蒸し返すことはないじゃないか、と思っただのである。

「くそー」いつもの駅に向かう道を歩きながら木島は呟いた。「今

日という今日は俺も頭にきたぞ」

といって、引き返し、妻とやりあう時間はもはやない。木島は、その不満と怒りを、仕事に向けることにした。

「ふざけるなよ。駆け込み乗車がどんなに危険か、今日こそ思い知らせてやる……」

木島はブレーキレバーを引き、地下鉄を減速させた。

高階洋平は、急いでいた。家を出るのが遅れたのは、単にぼうつとしていたせいである。半年ほど前、四十数年連れ添った妻が急死した。くも膜下出血だった。

それから、ぼうつとする時間が長くなった。

『だからといって、約束の時刻に遅れるわけにはいかん』

地下鉄のシルバーシートで、洋平は腕時計に目をやった。久しぶりに出席する、会社の旧友会である。かつて机を並べ、時には同じ釜の飯を食い、共通の目的を達成するために汗を流した仲間たちと再会するのだ。現役で仕事をしている時は、仲がいいとは言えなかった連中だが、定年退職してからは、急速に仲間意識が芽生えてきている。皮肉なものだった。

『確か、次の駅で乗り換えだったな』

洋平は腕時計から目を上げると、よっこらしよ、と立ち上がった。

素早く降りられるよう、なるべく早めにドアのそばまで移動しておいたほうがいい、と考えたのだ。最近の自分の体力の無さ、運動神経の衰えは十分に自覚している。

その時、電車がカーブにさしかかり、ガタン、と揺れた。

「おっと」と

よろけた洋平は、吊り革につかまろうとした。しかしその手は空を掻いた。バランスを失い、倒れそうになった洋平は、思わずそばにいた若い女の腰に抱きついていった。

「なにすんだよ！ このジジー！」

女は洋平の手をふり解き、いきなり突き飛ばした。洋平は電車の床

に尻餅をついた。

「どうしたんだよ、ユキ」

女の連れ合いとみられる若い男が、女に歩み寄った。長髪を茶色に染め、サングラスを頭に乗せている。日焼けした肌はざらざらに荒れ、線のように細い目で洋平を睨み付けた。人間というより、とかげや蛇の仲間のような顔だった。血が通ってないような、ひとかけらの知性も感じられない凶暴さがにじみ出ている。

「いや、失礼」

洋平はのろろと立ち上がった。

「このジジイ、ふざけやがつて」女が洋平を指さして言った。「あたしのお尻に、抱きついたんだ」

「あんだと？このじじいが？」

ポケットに両手をつっ込んだ凶暴そうな若い男は、洋平の胸ぐらを掴み、ドアに押しつけた。同時に電車が駅に停まり、扉が開いた。

「外に出るこの野郎」

若い男は洋平をホームへ突き飛ばした。

「おっとつと」

洋平はたたらを踏むように駅のホームに押し出された。訳がわからなかった。大変な誤解を受けていることは確かだった。何とかしなくてはいけない。

「ジジイのくせになめた真似をしくさつて。てめえ、ぶっ殺してやる」

凶暴そうな若い男はガムを噛みながら大股で近付いて来る。洋平を睨み付けるその顔には、慈悲や優しさのかけらもない。同じ人間とは思えなかった。やはりは虫類か、下等な動物と向き合っている感じである。

「ご、誤解だよ君。とにかく落ち着きなさい」

しかし、とにかくこのままでは乗り換えの電車で遅れるどころか、更にたいへんなことになると思った洋平は、若い男を制するように両手を前に突き出した。

「おい、誤解だつてよ」

若い男はフン、と鼻で笑い、後ろを振り返った。さつき洋平が抱きついてしまったユキと呼ばれる女が、ポケットに両手をつっ込んで立っていた。

「冗談じゃねえよ。誤解つてことがあるかよ」

男みたいな口調でユキという女が言った。彼氏に負けず劣らず頭は弱そうだ。しかし今はそんなことを言っている場合ではない。

「で、電車が揺れたせいなんだ。わざとじゃない」

年長者の威厳を出せればいいのだが、と思いつつ、洋平は懸命に弁解を試みる。

「そうかよ」

効果はまったくないようだった。いきなり、若い男の蹴りが洋平の腹に飛んできた。

「ぐえっ」

まさかそんなことを予想していなかった洋平は、まともにその蹴りを腹に受け、体をくの字に折り曲げ、その場にうずくまった。

「いいぞいいぞ、やっちゃえやっちゃえ」

女がはしゃぎたて、手を叩いてぴょんぴょん飛び上がった。「じじいに強いとこ見せてやんなよトオルちゃん」

「おうよ」

トオルと呼ばれた若い男は、腹を押さえて下を向いた洋平の顔に、ポケットに手をつっ込んだまま膝蹴りを飛ばした。洋平にはよけるだけの反射神経がない。まともに食らった。

「ぶっ」

鼻を中心として、鈍い衝撃があつた。洋平はよろめき、ホームに尻もちをついた。たたり、と鼻穴から流れ出てくるものがある。手で押さえて、その手を開いてみると真っ赤に染まっていた。かなりの量の鼻血が流れている。しかし思ったほどのダメージはなかった。膝蹴りは正確ではなく、当たりが浅かったのだ。若い男がポケットに手をつっ込んでいたせいかもしれない。

「なにやってんだよ。蹴りぐらいちゃんと入れろよ」

ユキがトオルの頭を平手でぴしゃりと横殴りにした。

「バカヤロー、髪型が乱れるだろ！」

トオルはどうやら反射的にユキの頬を思いっきり平手で殴りつけた。ピシイイッと、すごい音がした。

「いつてー」

ユキが殴られた頬をおさえてうずくまった。

「なめんじゃねえよバカアマ」

吐き捨てるように言くと、トオルは洋平の方を振り向いた。「じじい。みんなてめえのせいだぞ」

トオルは、暴力を楽しむかのようにニヤニヤと笑いながら洋平に一步步近付いて行く。

「たすけて……」

洋平は叫ぼうとしたが、まともな声が出ない。恐怖のなせる技だった。ホームに行く人たちは、皆見て見ぬふりをし、足早に通り過ぎて行く。

『殺される……』

洋平は心底恐怖した。トオルの後ろで、ユキという女が憎しみに満ちた目で立ち上がるのが見えた。信じられないことに、ユキは次の瞬間、トオルの背中に向かって跳び蹴りをした。

「ぐっ」

蹴り自体はたいしたことはなかったが、不意をつかれたトオルはよろめいた。怒りの表情でユキを振り向く。

「てめえ」

火事場のくそ力、とはよく言ったものである。トオルがユキに氣を取られたその時、洋平はすくつと立ち上がると、上りのエスカレーターに向かって駆け出した。

「あ、じじいが逃げた！」ユキが叫んだ。

「なに？」

再びトオルの意識が洋平に向けられる。「待ちやがれっ！」

トオルが洋平の後を追って駆け出した。

洋平は必死で駆けた。駆けに駆けた。こんなに真剣に走ったことは、六十二年の人生で記憶にない。上りのエスカレーターを駆け上り、駅の構内を走りながら駅員の姿を探す。しかし、こういう時に限って駅員の姿は見えないのだ。人員削減、という言葉がなぜかその時洋平の頭の中に浮かんだ。

「逃げるんじゃないよ、じじい！」

背中からトオルの声が迫ってくる。もうすぐ後ろまで来ている感じだ。洋平は乗り換え用の下りのエスカレーターに向かった。心臓がばくばくいつている。苦しい。しかし、止まるわけにはいかない。あんな下等動物みたいな連中に、殺されたのでは堪らない。何の為の人生だったのか。

洋平は下りのエスカレーターを必死で駆け下りた。乗り換える筈だった別の路線の地下鉄が、ホームに着いた音がする。

「駆け込み乗車は危険ですからおやめください」

アナウンスが聞こえてきた。しかしそんなことはかまっていられない。なにしろ後ろから、凶暴なあの若者が迫ってきているのだ。

ホームに発車ブザーが鳴り響いている。

先頭の車両には、鈴なりの人が乗り込もうとしていた。飛び込む余地はなさそうだ。洋平は先頭車両を通り過ぎ、二両目の最初のドアに飛び込もうとした。

『すごい勢いで駆けてくる奴がひとり』

地下鉄の運転席にいた木島一成は、エスカレーターを必死の形相で駆け下りてくる洋平を認識していた。しかし決めたことは決めたことだ。

『発車のベルが鳴り終わったら、とにかく迷わず扉を閉める』木島はドアを開け閉めするボタンに手をかけた。『思い知るがいい、駆け込み乗車の乗客たちよ。お前たちのおかげでダイヤは乱れ、俺たち地下鉄の職員がどれほどのストレスを受けているか』

発車のベルが鳴り終わった。木島は何の躊躇もなく、扉が閉まるボタンを押した。

電車のドアはもう目の前にある。心臓と肺は何とか持ち堪えてくれたようだ。死にそうだが、なんとかなる。

『電車に飛び込みさえすれば……逃げ切れる。助かる』

僅かな望みに賭けて、二両目の最初のドアに飛び込もうとした洋平の目の前で無情にもドアが閉まった。

「目標、達成！」

飛び込み乗車をしようとした乗客の目の前でドアが閉まったことを確認すると、満面に笑みを浮かべて、運転士の木島は電車を発進させた。

「あわわ」

洋平は電車と一緒によちよちと歩き出した。そうせざるを得ない状況にあったのだ。背広の襟のほんの一部が、扉に挟まれている。面積にして、ほんのわずか。こんなもの、すぐに抜けるとたかをくくっていたのだが、どんなに引っ張っても抜けないのだ。運転士は気付かないらしく、電車はゆるゆると進み始めている。

『挟まれた面積が小さすぎて、センサーが作動しないのかもしれない……』

蟹のように、横歩きに小刻みに足を運びながら洋平はなぜか冷静にそんなことを思った。

突然、ホームに楽しそうな声が響きわたった。

「なにやってんだよ、じじい」

その声に振り向いた洋平は、追いついたトオルが、地下鉄のドアに張り付いたままよちよちと歩く自分の奇妙な格好を指さして笑っているのを見た。

「追いついたぞ。もう逃がさねえからな」

洋平は額に脂汗を浮かべ、蟹のように電車と平行に歩いて行く。電車のスピードが上がり始める。足を小刻みに早く動かさなくては追いつかない。

「おい、どうしたんだよジジイ」

トオルは、洋平の置かれた困った状況に気付き、手を叩いてはよし、たてたながら後ろを一緒に走り出した。

「た、助けてくれ、背広が」

電車と一体になったまま走りながら、洋平はトオルに懇願した。しかし、

「背広が？ 挟まってんのかよ！ まじかよ！」

と信じられないことに、トオルは洋平を指さしてげらげらと笑うだけだった。

「お願いだ。電車を止めて」

視界の端に、トンネルと壁がぐんぐんと迫ってくる。洋平は悲鳴をあげ、扉に挟まった背広を引き抜こうと必死に体をのけぞらせた。

電車はしかし、スピードを緩めるどころか、ぐんぐんと加速していく。何かの間違いに違いない。じきセンサーが働く筈だ。でなければこれは、極めて悪質な冗談だ。

『どうなってるんだおい！』

と思った瞬間、頭にガン、と衝撃がきて、世界が終わった。

エスカレーターからふて腐れたように降りてきたユキは、だらだらと歩きながらホームにうずくまるトオルに近づいて行った。

「おい、じじいはどうなったんだよ」

しかしトオルは答えなかった。しゃがんだまま、トンネルの壁を茫然と見つめている。

「おい、ちゃんとじじいに追いついたのかって聞いてんだよ」

ユキはトオルの肩に手をかけて、無理やりに振り向かせた。次の瞬間、

「キヤーーーーー！！！」

と、ユキは絶叫した。

トオルは上半身、血まみれになっていた。

「返り血だよ。俺の血じゃねえ」

言い訳するように言くと、トオルは立ち上がり、足元に転がる、血まみれの物体を足で転がした。

「じじいの首が、とれちまってよ」

それは、半分潰れてぐしゃぐしゃになった洋平の首だった。首はごろりと転がり、片方だけ残った死んだ魚のような目が、どろりとユキの顔に向けられた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1751m/>

駆け込み乗車

2010年10月10日21時28分発行